
白き鬼神と蒼穹の引き手(仮)

シノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き鬼神と蒼穹の引き手（仮）

【Nコード】

N6916Y

【作者名】

シノン

【あらすじ】

遺伝子の異常変化により凶暴な存在と化した生き物たち。【災禍】と呼ばれるその恐怖を相手に、人類は生き残ることが出来るのか。現代より少し先の未来の話。主人公が異形の化け物相手に戦うお話です。

素人なので優しい目で見てくれるとうれしいです。

主人公が戦ったり、突っ込んだり、あきれたり、泣いたり、笑ったり。

スピード重視のお気楽小説、開幕！

プロローグ 世界観（前書き）

初投稿です。素人なので生暖かい目で見守ってくれとうれしいです。

プロローグ 世界観

時は現代。

人類は未知の恐怖におびえていた。

【災禍】 《カラムיתי》という存在が明らかにされたのは今からおよそ二十年前。

地球上の生物の遺伝子が異常変化することによって生まれた異形の化け物たち。

銃弾を弾き、非常に強い耐火性を持つ彼らは、人類全体の共通の敵となっていた。この脅威に対し、各国は即座に対策を施し始める。

その結果、【災禍】にも弱点が存在することが分かった。

彼らの外殻は刃に弱かった。簡単に切り裂けるというほどではないが、足止め程度にしかならない銃弾や火炎放射器に比べれば幾分かマシンなのは確かであった。この点、日本は他国より恵まれていたといえる。日本には昔から刀という斬ることに特化した武器があったからだ。

【災禍】の外殻は点の衝撃に非常に強いことが確認されているため、槍や弓などの貫く武器ではなく、大剣や刀、もしくはハンマーなどの武器で戦うことが、常識として確立されていた。

また、【災禍】が世間に認識されるのとはほぼ同時期に、特殊な力に目覚める人間が確認されている。これは【災禍】という天敵に対する、人類という種族の防衛機構のようなものではないかと考えられている。その超能力とでもいうべきものを身につけた者たちは、体に『霊頸』と呼ばれる新たな機関を持っているため、進化した人類ではないかと考える学者も多い。

彼らもまた、【災禍】への対抗策として、戦うことになる。各国は非常に強い戦力である彼らを、教育機関をつくり管理することを決定。生まれた子供はすべて病院で『霊頸』の有無を調査され、十四歳になると同時にその教育機関に移される。

これは、彼らの戦いの物語だ。

七年前。

とある【災禍】が日本の山間の町を襲った。人口三百四十二人の小さな町はわずか二時間でほとんどの人間が死に絶えた。

第特級【災禍】、アラバスタ。大鷲が異常進化した【災禍】である。巨体に似合わぬ異常な機動力と、【災禍】の特徴ともいえる堅固な外殻。それは世界中の政府を悩ませるもっとも厄介な【災禍】だ。空を飛ぶ敵に斬りかかることなどできず、銃弾はあっけなくはじかれる。戦闘機が近距離で放ったミサイルすら易々とかわされ、体当たりを食らってバランスを崩し、海に墜落した。アメリカが三十基の戦闘機で出撃したが、遭遇の一時後に全滅させられている。小さな町に対抗策などあるはずもなかった。

日本政府が連絡を受けて現場に着いたときは、そこには廃墟と食い散らかされた元人間が転がっているだけだった。生き残りは四人。彼らの証言で町を襲ったのはアラバスタであることが確認された。四人は政府によって保護され、三人が元の生活に戻っていた。そこに至るまでに絶大な苦労があったことを、念のため書き記しておく。

残った一人は『霊頸』持ちだった。七歳の少年は国の施設で暮らし、【災禍】の知識を貪欲に吸収していった。彼が『力』の使い方を理

解したのは八歳の時。《超感覚》と名付けたその『力』と、十歳の時より始めた戦闘訓練。少年が選んだ武器は、槍。【災禍】に対して不利であるとして、施設の職員は口をそろえて反対したが、少年は自分が選んだ武器を決して変えようとはしなかった。

少年は年に似合わぬ物静かな少年に育っていった。朝早く起きて黙々と槍を振るう少年。昼間は【災禍】に対する知識を勉強し、夕方になると槍の訓練や走り込みを行う。

施設に入ってから六年。

入学の時間が近づいてきていた。

「……いよいよ君ともお別れだね、悠里君。」

施設の入り口に立って感慨深そうに眼鏡を持ち上げる男性。優しい風貌の中に、隠しきれない別れの寂しさがあった。その目が写すのは、細く引き締まった体をした十四歳の少年。右手には槍が握られている。日本人らしい黒髪と、深さを湛えた黒い瞳。

「……七年間もありがとうございました、須藤先生。」

言って、少年は深々とお辞儀をした。それを見た須藤と呼ばれた男性は苦笑する。

会ったばかりのことを思い出したのだ。

顔を上げた少年も隠し切れない笑みを浮かべていた。心を開いたものにしか見せない、優しく悲しい微笑。

「僕から言えることは一つだけさ、悠里君。」

須藤はまた眼鏡の位置を直しながら言う。おそらくはそんなことを考えたこともない、少年へのアドバイスだ。

怪訝な顔をした少年に、須藤は優しい笑みを浮かべ言う。

「死なずに、帰っておいで。君の家はここなんだ。」

後ろに並んでいた職員たちが一斉に頷く。

それを見た少年は驚くように周囲を見る。職員総出で見送りに来ていたのだ。

腕組みをしてしきりにうなづく男性職員。

ハンカチで目元をぬぐいながら笑う女性職員。

恰幅のいい体をいっぱいに揺らして手を振る食堂のコック。

「…………みなさん、七年間本当にありがとうございました!!」

少年は目元から溢れ出しそうになる涙をこらえながら、施設に別れを告げた。

【災禍】と戦うための、更なる力をつけるために。

ブログ 世界観（後書き）

誤字脱字、感想やアドバイスなど、ありましたらお願いします。

第一話 始まりと邂逅

ただ学園と称される教育機関。

その戦闘技館——体育館より頑丈な施設——に八十二名の新入生が並んでいる。

一般の学校と違うことは、三割ほどの生徒が何らかの形で武装していることだろう。周囲の生徒が緊張でその身を固くする中、明らかに空気が違う二人がいた。

右手に槍を携え、目を閉じている少年と、弓を支えに眠りこける白髪の少女だ。見る者が見れば、少女の周囲に青い靄のようなものがたなびいているのが見えるだろう。

「今年はずいのが入ってきたね。」

車椅子に腰かけた老齢の女性が、しみじみと言う。その両目は紫色に輝いており、見定めるように新入生を見回している。

スキル《鑑定眼》。目に写した対象の情報を、大まかにだが知ることのできるスキルである。

「確かにあの二人はほかの生徒とは一線を画していますね。」

もっとも、少年と少女がほかの生徒よりも強いであろうことなど、ある程度の修羅場をくぐってきたものが見れば一目瞭然だが。

（スキル《超感覚》……記憶力、思考力、聴力、視力の強化ですか。少女は、スキル《霊姫》……おや？ 私の《鑑定眼》でも見れませんか。相当ランクの高いスキルのようですね。）

だがおそらく弓で戦うことによる何らかのメリットがあるスキルなのだろう。そうでなければ、【災禍】への有効打にはなりにくい弓を使う理由が見つからない。

槍もそうである。だが槍は弓と違って前例がある。かつて、槍を使って【災禍】と渡り合っていた女性がいたのだ。日本最強と言っても過言ではない、『神槍』と呼ばれた女性が。

（問題は彼が『神槍』の域までたどり着けるかどうかですか……：……いいえ、たどり着かせるための学園ですね。）

「よく来た、新入生の諸君。これより入学式を始める。」

淡々とした声を聴いて、老婆は思考の海から現実へと意識を引き戻す。槍を持った少年は目を開き、少女は眠そうな視線を壇上の男に向けた。

「これからのことを簡単に説明する。自分がどんなスキルを持っているかわからないものは、玉響教授に『視て』もらうように。」
玉響教授の名前が出たタイミングで、老婆は車椅子でゆっくりと前へ出てお辞儀をする。柔和な笑みを浮かべたまま、ゆっくりと後ろへと下がった。

「ここに来る前に何らかの形で戦闘訓練を行っているものは、戦闘科に行って自分の名前を登録してもらえ。本格的な授業は明日からだ。各々、武器を揃えるなり、班を組むなり、明日に備えてくれ。ああ、あと班は基本的に四人編成だから、五人以上で組むことは認められていない。以上だ。」

話が終わったと判断した人間がチラホラと動き始める。

教師たちが注目している二人も、ゆっくりと戦闘科の建物に歩いて行った。

「指揮官と前衛、武器は槍で登録お願いします。」
「お名前とクラスをどうぞ。」

「1Aの葛城悠里です。」

戦闘科の建物は非常に無骨だった。一見すると普通の事務室に見えるが、傘たてのようなものに、剥き身の剣がいくつも刺さっている。そこに三十八人の新入生が集まっていた。

そのうちの一人である葛城悠里は、滞りなく登録を終えた……はずだった。

「葛城悠里さんですね？　少々お待ちください。……こちらが班申請の紙になります。」

「へ？　いや俺はまだ班は……」

悠里がここに出向いたのは単純に自分を戦闘科に登録するためである。班を組むためではない。そもそもこの学園に入学したての自分に、どうやって班を組めというのだろうか。

「今回の入学者は八十二名です、四で割ると二余ってしまいます。ならば、成績上位者同士で組んでもらい、できるだけ戦力差を均等にしようという上の考えです。」

よく見ると、すでに名前が書いてあった。葛城悠里の下に、鳳院雪那という名前が既に書かれている。

悠里は、入学時の試験で満点を取ったことを思い出した。

「すでに鳳院雪那さんのサインは頂いているので、あとは葛城さんがサインしていただければ、登録は完了となります。ちなみに拒否権はないのであしからず。」

にっこりとほほ笑む栗毛の受付嬢に、思わずため息をつきかける。悠里はかろうじてそれを堪えると、班申請の紙にサインするのだった。

翌日。

朝早く起きた悠里は愛用の槍を持って外に出た。昨日のうちに確認しておいた訓練場へと向かう。

訓練場では、上級生と思しき人たちが剣や刀を振るっていた。その邪魔にならないように端の方へよると、悠里は槍を振るい始める。ただ無心に槍を振るう。もちろん周囲の状況を探ることも忘れない。珍しい槍という武器を振るう悠里に最初は注目が集まっていたが、やがてみな自分の訓練に戻っていった。

突く、薙ぎ払う、振り回す。仮想敵の攻撃をかわし、受け止め、槍ではじく。

重い鉄製の槍を振り回しているのに、悠里の態勢は崩れない。

実はこれには秘密がある。

前述したとおり、スキルと呼ばれる力に目覚めた者たちには『霊頸』と呼ばれる器官を持つ。いまだに原理は不明だが、『霊頸』はエネルギーを生み出す。このエネルギーは『霊力』とよばれ、彼らはこの力を使い無意識に身体能力を上げているのだ。また、『霊力』は武器に纏わせたり、『霊術』として使うことが出来る。もっとも霊術は発動するのにそれなりの時間がかかるため、戦闘に使う者はまずくない。

一通り槍を振り終わった悠里は、まだ訓練している上級生を尻目に訓練場を後にした。

ゆっくりと廊下を歩いて、1Aの教室に向かう。今が七時過ぎで、最初のHRが始まるのが七時半のため、余裕で間に合う計算となる。その途中だった。

「……………何してんだ？」

学校の廊下で行き倒れてる人間と出会ったのは。

第二話 決闘ともう一人（前書き）

このペースで行けるといい、なあ。

第二話 決闘ともう一人

「……………寝ている。」

「そういうことじゃねえっ!!」

悠里は思わず声を大にして突っ込んでしまった。床に横たわった少女は、ゆっくりとその身を起こした。背中の中ほどまで垂れていた白髪が光を反射して揺れる。眠たげに眼をこする少女はポケットとした黒い瞳で悠里を見つめている。

「質問を変えよう。どうしてここで寝てたんだ。」

「……………眠かったから。」

「自分の部屋で寝ろよ。」

ポクポクポクチーン。

なるほどといった様子で手を叩く少女に、悠里は関わり合いになるのをやめようと判断した。しかしそうも言っていられなくなった。

「……………ここで会ったのも何かの縁。私は鳳院雪那。よろしく。」

少女はそう言って弓を握りしめた右手を差し出す。

対する悠里は、どこかで聞き覚えのあるその名前を、どこで聞いたのか思い出そうとしていた。

ほーいんせつな。ほういんせつな。鳳院雪那。

「お前が俺のパートナーか……………。よろしく、鳳院雪那。俺の名前は葛城悠里だ。」

全てを諦めたかのようにため息をついた悠里は、差し出された右手を見やる。その右手はいまだにがちりと弓を握りしめており。

「…………パートナー。握手。」

「出来るわけないのを見てわかれ!!」

普段は冷静な悠里は、この鳳院雪那という少女のペースに飲み込まれていた。

朝のHRが始まった。

一クラス四十一人で構成されたクラスで、やはりというか悠里と雪那は浮いていた。

その二人の席は隣同士である。おそらく学園側が取り計らってくれたのだろう。で、悠里の隣で雪那が何をしているのかというと。

寝ている。

より正確に言うと爆睡している。

教師も特に注意する気はないのか、てきぱきと連絡事項を伝えていく。もっとも教師が説明している連絡事項は、あらかじめ設けている説明会をきちんと覚えていれば全く問題はないのだが。

悠里は腕組みをして不機嫌そうな空気を周囲にふりまいている。なぜならこの爆睡女が説明会の時に起きていたとは考えづらく、結局自分が全部説明することになるのを理解しているからだ。

十分後、まさにその通りになった。

一時間目の授業は、簡単な【災禍】の見分け方の授業だった。目の前の【災禍】の強さが分からないことは、ほとんどが死につながるので生徒は必死に授業を聴いていた。

二人を除いて。

雪那は相変わらず爆睡しており、悠里も興味がないと言いたげに窓の外を見ていた。そのとき窓のそとでは上級生が戦闘訓練を行っており、それを見て参考になるような上級生を探していたのである。

（あの大剣使い動きがいいな……。いや、あれは防御用のスキルを使っているのか。）

そんな二人に教師が業を煮やした。

「葛城、第特級【災禍】を四体あげてみなさい。」

「アラバスタ、バズット、ゲヘナ、ホーホーホー。」

悠里は教師の方を一瞥もせずに即答した。その目はまだ校庭で大剣を振るう上級生から離れない。

「鳳院、それぞれの特徴を言ってみなさい。」

「……………大鷲の異常進化型。空中からの奇襲に注意。ヒグマの異常進化型。見かけに似合わず速い。元が分かってない【災禍】。発見報告もほばない。海蛇の異常進化型。音で敵を惑わせる。」
雪那はドサツと力尽きたように机に突っ伏すと、そのまま寝息を立て始めた。

悠里は何事もなかったかのように外を見続けている。そんなことを繰り返している間に一時間目は終わったのだった。

二時限目は霊術の使い方の授業だった。

戦闘で使いづらいといっても、時間をかければ威力の底上げや機動

力の強化などが出来るため、覚えておいて損はない。霊頸によって生み出されたエネルギー、霊力を、『式』と呼ばれる回路に流すことで任意の事象を起こす——この方法が確立されたのはごく最近である。それまでは霊力を特定の部位に集中させることで、筋力の強化などを行っていた。

しかしこの方法は効率が悪く、せいぜい二、三分しか持たなかったのだ。

霊力を『式』に織り込むことで、より効率よく身体強化などを行うことが出来る。この発見は式を発明した人間とともに、大喜びで世界に受け入れられた。しかしその人間の詳細な情報は伏せられている。

一時間目を全くとっていいほど聞いていなかった二人も、この授業は最後まで真面目に聞いていた。

三時限目と四時限目は戦闘訓練。

この戦闘訓練こそが、学園の真髄と言えるだろう。座学や霊術の授業などはあくまでおまけに過ぎない。

周囲を高い石壁に囲まれた学園の校庭では、八十二名の人間が集まっていた。ようやく暖かくなってきた日差しを浴びながら、校庭を走り続ける生徒たち。

十周を越えたあたりで、数人の生徒たちがリタイアした。

二十周を越えたあたりで、半分の生徒たちがリタイアした。

三十周を越えて、走っている人間は十数人になった。その十数人は入学式に武器を持参した者たちである。彼らは自らの武器を構えたまま走り続けている。悠里と雪那は涼しい顔をして走っていた。

四十周を越えたところで、教師がストップをかけた。十分間の休憩である。わずかに息が上がっているだけの生徒たちは、リタイアした生徒たちの羨望とやっかみの視線を受けながら、腰を下ろした。悠里も休むことの重要性を知っているので、その場に腰を下ろす。すると、普段の眠そうな瞳を鋭くとがらせた雪那が近づいてきた。

「決闘だ、葛城悠里！！」

やる気溢れる声で叫んだ雪那を、校庭にいた人間全員が呆然と見つめる。

……………どちら様で？

第二話 決闘ともう一人（後書き）

誤字脱字、アドバイスや感想などありましたらお願いします。

第三話 決闘の結末（前書き）

投下ッ！！

第三話 決闘の結末

「……………とりあえず理由を聞かせてくれ。」

周囲があまりの衝撃に凍り付くなか、なんとか平静を取り戻した悠里が問いかける。

暖かな春の校庭に、少女の言葉を待つ八十一人の生徒……………シュールな光景だ。

「簡単なことだ。貴様が本当に私のパートナー足り得るのか……………証明してもらおう。」

「あなたは本当に鳳院雪那さんですか？」

思わず敬語になってしまった悠里の問いかけは届かなかったようだ。ざわつく周囲を見かねた教師がようやく話に割り込んでくる。そのまま悠里と男性教師でひそひそ話開始。

「悪いね、葛城君……………彼女はすごい二重人格の戦闘狂なんだよ。」

「だから諦めて戦えっていうんですか。」

「う、まあ……………安全措置はとるから大丈夫、だと思う。」

「……………なんで今一瞬詰まったんですか。」

「いや、彼女ね、スキルの暴走で家屋が半壊したって噂が……………」

「……………やればいいんですね？ 負けてもいいですよね。」

「それはもちろん！」

いい笑顔だった。対する悠里は重くため息をつく。

自分が組んだパートナーは、非常に面倒くさそうなやつだと思いがら。

「準備はいいな。」

「目前二メートルぐらいまで近寄ってからお願いします。」

「戯言をほざくな。」

悠里は腰だめに槍を構え——といっても安全のため穂先は丸い——、雪那も矢を弓につがえた。こちらの矢の先も潰されている。二人の距離はおよそ十七メートルである。なぜこんな中途半端な数字になったかという、二十メートルでやろうとした雪那に悠里がごねてごねてごねまくったからだ。

出来るだけ有利な戦場で、が悠里のモットーなので無理もないかもしれない。

両者の間に緊張感が満ちる。悠里は槍を構え前を見据え、敵のわずかな挙動も見逃さまいとしている。

「では、行くぞ？」

ピイイイイイイイ！！

青空に開始のホイッスルが響き渡った瞬間、悠里が素早く身をかがめて地面を蹴る。

ッヒュンッ！！

雪那が放った矢は、一瞬前まで悠里の胴があった場所を突き抜ける。そのスピードは、明らかに異常だった。女性……それもまだ年若い少女が出せる矢のスピードではない。

（スキル……？ いや、あれは違うな……霊術か。）

雪那はあらかじめ、矢に式を刻んでいた。その効果は空気抵抗の減少、スピードも上がるというものである。

雪那は一本目が外れたことにも動揺せず、素早く二本目の矢を構えた。

（スキル《超感覚》起動！！）

手加減をして勝てる相手ではない。お互いの実力を測るというならいい機会だ、こちらでもできる範囲で全力で行かせてもらう。悠里は自分のスキルを起動すると目を見開いた。

《超感覚》により上昇した動体視力は、矢じりを掴む少女の右手の動きを止まっているように見せる。その指が離された瞬間、右手に握りしめた槍を振り上げる。まるで世界を置き去りにして自分だけが動いているような感覚。

（もっと先がある……！！）

振りあげた槍は、狙い過たず矢を払いのけた。

カンッと軽い音が響き、あさっての方向にすっ飛んで行く矢。それを一瞥すると、悠里は距離を詰めるべく地面を蹴った。

残り十二メートル。

動揺しつつも冷静に、雪那は距離を取る。まさか槍で防がれるとは思っていなかったのか、その顔は非常に悔しそうだ。

そのくちびるが、動く。普通ならば聞き取れないほどの声量で呟いたのだろうが、《超感覚》によって聴力が上昇している悠里にはかろうじて聞き取れた。

「集え蒼き霊たちよ、汝らが友が命ずる——」

ぞくっ、と悠里の背中に寒気が走る。

本能と体全体が訴えかける、『全力でかわせ』と。

強化された目に映るのは、雪那の手元で青白く輝く一本の矢。その矢にどれだけのエネルギーが秘められているのか———そんなことを考える悠里の耳に、雪那の呟き声が届いた。

「————我が敵を殺せ。」

雪那の指が開かれる。それを見た瞬間、一も二もなく、悠里は全力で横に跳んでいた。

雪那の指から放たれた光芒は、悠里の横を通り過ぎると校庭に突き刺さる。

「これは……食らったら死ぬんじゃない……」

校庭に突き刺さった矢は一本だが、その周囲に四つの穴が開いていた。撃った矢は一本。穴は五つ。

霊力によって編まれた不可視の矢。それが今の技の正体だ。

「よくかわした、が。次は十本だ。」

「何本まであるんだ!？」

「安心しろ、百はない。」

「出来るかっ!!」

軽口をたたきながら悠里は地面を蹴る。

確かに不可視の矢は脅威だが、雪那は悠里の前に手の内を晒し過ぎた。

（《超感覚》派生スキル解放、《並列思考》!）

派生スキル。

これは最近その詳細が明らかにされたものだ。身体強化などのスキルを使って、体の特定部分を強化すると、たまに新たなスキルが目覚めることがある。

たとえば筋力上昇のスキルを使い続けると、《堅牢》という新たな派生スキルが発生することがあることが確認されている。

悠里が使う《超感覚》はその点、派生スキルの宝庫である。

思考力を上昇させれば《並列思考》に。

視力を上昇させれば《鷹の目》に。

だが、派生スキルは持ち主に負担を強いる。発動中はその部位に痛みが走るし、同時に多種のスキルを使うと、元の自分の体との差異に、感覚が狂っていくとされている。

悠里は自分が持つ派生スキルを全て解放したことは一度もないから、それをしたらどうなるかはわからないが、碌なことにはならないであろうことはわかっていた。

(っぐ………!)

派生スキル《並列思考》の発動に伴い、頭痛が悠里を襲う。同時に二つのパターンを考えられるようになった頭で、雪那の姿勢の意味を判断する。どこを狙っているのか、どのタイミングで撃つのか、《並列思考》と強化された記憶力と視力で見極める。

本人も気づいていない、無意識の呼吸のタイミングすら記憶し、攻撃をかわす。

連続で放たれる矢の全てを、雪那が撃つ前にかわしきる。

「嘘………だろう………?」

「嘘だと思うなら好きにしろ……。。」
距離を詰め切って、雪那の細い首筋に槍の穂先を当てた直後、悠里は意識を失った。

第四話 夢に見たモノ（前書き）

厨二病全開です、いつもですが。
……反省は、していません。

第四話 夢に見たモノ

『—————目覚めたか、天衣無縫。』

(ここは……………?)

目が覚めたとき、悠里が見たのは一面に広がる雪景色。どこまでも純白。

一切の穢れを知らない、限りなく澄み切った白。平坦に広がるその大地に、悠里は横たわっていたのだった。

『ここはお前の精神世界。私は故あってお前の中に潜む人ならざる者。』

突風が吹いた。突風は地面の雪を巻き上げ、その場に形を作っていない。

呆然とそれを見る悠里。自分がなぜこんなところにいるのかも、まだ全く分かっていないのだ。

『私はお前たちがスキルと呼ぶものの正体だ。人の身に潜み、寄生し、代わりに力を与える。』

集まった雪が、一人の女性の姿になった。それは悠里の記憶に焦げ付いた女性の姿。

槍を握り、凛々しく【災禍】を睨み付けるその雄姿。

—————そこには、かつて『神槍』と呼ばれた女性が立っていた。

「……………母、さん？」

『お前の記憶から、お前がもっとも安心できる姿を取らせてもらった。』

瞬間、悠里の胸の中にたえようのない怒りが吹き荒れた。それは自分が慕うものを汚された恨み。

自分の中の偶像を侵略されたが故の、抑えようのない憎しみだった。

「貴様！」

立ち上がり、手をかざす。足元の雪が巻き上がり、愛用の槍を形作る。

『そうだ、ここはお前の精神世界。お前が望むものは何でも作れる。もっとも、それを本能で理解できる人間なぞそうはいないが。』

言いながら、母の形を持った何かは、悠里と同じように手をかざした。

雪が巻き起こり、吹雪の壁となる。あまりの豪風に悠里は近づくこともできない。

『もちろん、お前に寄生する私も同じことが出来る。』

「その姿とその声で……………喋るなあああ!!」

《超感覚》起動。

強化された視力は吹雪の薄いところを見破る。

同じように雪を巻き上げ、雪玉を作るとそこに放り込んだ。放り込まれた質量に風の計算が乱れ、吹雪の勢いが弱まる。その隙を逃さず、悠里は振りかぶった槍を振り下ろした。

ギンッ。

金属的な音を響かせて、悠里の槍は、相手が持つ槍にはじかれた。

『天衣無縫。お前とゆつくりと話せないのは残念だが……理性ある会話は望めないようだ。出直すでしょう。』

悠里の体は、相手が投げ放った槍に貫かれた。

急速に悠里の意識が薄れていく。

『次会うときは……スキル《天衣無縫》を。お前に託そう。』

薄れていく意識の中で最後に悠里が聞いたのは、そんな言葉だった。

「ここは………？」

「目が覚めましたか、葛城悠里君。」

目を開けると、モスグリーンの天井が目に入った。どうやら医務室のベッドに横たわっているようだ。

声が聞こえた方向に顔を向けると、優しげに笑う老婆と目があった。

「あ………玉響教授………。」

「入学式以来ですね、葛城君。」

「………どうして医務室に？」

思い出した。

決闘を挑んできた鳳院雪那の首筋に、槍を突き付けたところで、派生スキルの反動で意識を失ったのだ。

それより、なぜ玉響教授がここにいるのかだ。

彼女は《鑑定眼》をもつ学園の希少な人材である。一生徒——しかも新入生——を見舞うような人物ではないはずだ。

「いえ、あなたは鳳院雪那さんと戦ったのでしょうか？ 彼女のスキルは私の《鑑定眼》でも見れなかったので、興味本位です。」

「はあ。」

医務室に何とも言えない沈黙が流れた。

玉響教授は次の言葉を待つように悠里を見つめ、悠里は何を言えばいいのかわからないので押し黙る。

強かったですよ？ かろうじて勝てました？

いや、なんか違う気がするなあ…………。

なやむ悠里に、玉響教授が助け船を出した。

「彼女のスキル名は《霊姫》。もしよければあなたの考えを聞かせて欲しいのですが…………」

「あ、ああ、そういうことですか。しかし、俺なんかの意見を聞いても…………。」

「《超感覚》。あなたのスキルで感じ取れた何らかの情報があるはずです。戦闘中に感じ取れた情報は重要ですよ。」

まったく言うとおりのので反論できない。

「…………おそらく霊術使用の補助の役割のスキルではないかと。あと、

有機物に霊力を纏わせることで、その威力を底上げしています。」
「有機物？ ……物体ではない理由を聞かせてもらえるかしら。」
「物体であれば速射の利点がある銃を使うでしょう。けれど弓を使うということはおそらく。」

この判断の理由には、戦闘中に聞いた雪那の言葉も絡んでくる。

『集え蒼き霊たちよ、汝らが友が命ずる——』

今思えば、彼女の矢は神木か何かでできていたのかもしれない。
神木などの樹齢の長い木には、人間でいう『霊頸』のようなものが出来ることが確認されている。霊力を医療用に転用する技術も現在研究中だ。

「なるほど……それは、将来が楽しみです。」

「…………あの二重人格がちょっと……」

思わずといった様子でもらす悠里。

彼女の豹変についていける人材はかなり少ないのではなからうか。

あわてて口を押えたが、玉響教授は苦笑している。

どうやら学園側も彼女の扱いには苦労しているらしい。

「さて、では私は戻るとします。あなたも起きられるようでしたら、部屋に戻ってかまいませんよ。」

「え？ あの、医務の人は…………？」

「『休むべきか、そうじゃないか。それすらわからん人間はすぐ死ぬ、放っておけ。』……と、言っておりましたよ。それでは。」

あまりの暴言に呆然とする悠里を置いて、玉響教授は医務室を後にした。

「スキル《超感覚》……あの力はそんなものなのでしょう……もっと、強烈な、何かの力が……」

医務室を出た老婆は、車椅子を進めながらつぶやく。

「私も、歳ですかねえ。」

老婆は苦笑しながら首を振った。

第四話 夢に見たモノ（後書き）

お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます！
二日に一話ぐらいのペースで頑張るので、お付き合いください！

第五話 彼女の覚悟（前書き）

難産でした……。。

第五話 彼女の覚悟

翌日。

窓から外の校庭を眺めながら、悠里は今朝あった出来事を思い出していた。

なんだかんだ言って早起きしてしまった悠里は、愛用の槍を持って訓練場へ向かおうとした。

……ドアが開かない。

ゆっくりと昨日のことを思い出す悠里。結局気絶していたのは四時間ほどで、夕ご飯は食いそびれた。そのあと部屋に戻ると、死んだようにもう一度眠った。

……そんなことよりもドアが開かない。

鍵が閉まってる感じではない。というか、昨晚閉めた記憶がない。何かドアの前にあって、突っかかっている感じだ。

悠里は仕方なく窓から出ると、ドアの前にあるであろう物体を退けるべく、もう一度寮の建物の中に入る。
ドアの前にあった……いや、いたのは。

「…………ZZZ」

「お前かよ!!」

ドアに背を預けて眠りこける鳳院雪那だった。

「で、なんで俺の部屋の前にいたんだ？」

「…………謝罪？」

「なんで疑問形なんだ…………？」

とりあえず彼女を部屋に入れると、ベッドの上に座らせる…………と、寝ようとしやがったので、引きずりおろす。

聞いてみた質問には疑問形で返された。

「…………私にはわからない。」

「お前が知らなかったら誰も知らないから!!」

思わず声を大にして突っ込んでしまった。どうも彼女といるとペー
スが崩されてしまう。

ジト目で雪那を見ると、なぜか眠そうな瞳でどや顔された。…………
大丈夫かこいつ。

「私じゃなくて、姫が。」

「姫？」

ここで悠里は思い出した。彼女が二重人格の持ち主であることを。
姫というのは間違いなくもう一つの人格…………あの時戦った傲岸不

遜な戦闘狂のことだろう。

「…………あいつが、謝罪？」

「そんなに不満か。」

「っ!？」

どうやらいつの間に入れ替わっていたらしい。眠たげな表情は鳴りを潜め、代わりに威風堂々とした少女が腕を組んで座っている。その唇はへの字型に曲げられ、悠里が言ったことが相当に気に食わなかったようだ。

「私のことは姫とでも呼んでくれればいい。私もその方が呼ばれ慣れている。」

「…………。」

「そ、そんな顔で見えるな！ 私だって姫と呼ばれるのは恥ずかしかったのだ！ だが雪那が言っても言ってもやめないんだ……………!」

そりゃ本人が自分に文句言ってもな。言うこと聞かないだろう。

「そんなことより、昨日はすまなかった。お前を試すようなことをして…………間違いない。お前は一流の戦士になれる。」

「ああ、別に気にしてないからいい。」

実際勝てたわけだしな。

全く何も問題はない。

「本当だな？ たとえお前が私の矢を全て見切って大きく回避したのに、恐れて大げさに避けた挙句酸欠で倒れた愚か者として生徒の間で噂になっていて、私が自分の手の内を晒したくないという理由でその噂を助長していたとしても許してくれるんだな？ よかったよかった。」

「ちょい待てこら。」

そのまま部屋を出ていこうとする姫の襟首を掴んで引き戻す。

「どうした？ お前は謝罪を受け入れてくれたじゃないか。」

「その話は初耳だ。どういうことだ？ お前のあの矢は普通だと見えないのか？」

彼女はためらうように首を振った。

「……………そうだな。パートナーには話してもいいだろう。」
そして姫の独白が始まった。

《霊姫》。

それが私のスキルの名前。

能力はいたって単純、霊力の増大、周囲の霊力の吸収、そして霊たちの力を借りることだ。

霊たちの力を借りるというのは、その場に存在する残留思念を霊力に変換できるということ。戦場などの恨みの強い残留思念は攻撃力に。病院などの安らかな残留思念は防御力に。お前に行使した『増矢』の術式も私が独自に開発したものだ。恨みの念を『矢』という形に凝縮して撃ち放つ———そういう業の深い技なんだ。ん？ いまいちよくわからないって顔をしているな。なに、簡単な話だよ。私は死んだ人たちの強い感情を変換して力に変えているということさ。

……………ゆえに、私は、味方が死ねば死ぬほど強くなる。

味方がいなくなればなるほど、私の攻撃の力は増大していく……………

本当に嫌な能力だ。

……だがな、葛城悠里。私はそれを受け入れた。雪那を守るためならば、とな。たとえば力を使うたびに怨嗟の声が聞こえたとしても、だ。

もちろんこの覚悟をお前に押し付ける気はない。ただ、お前にも雪那を守ってやってほしい。

……なぜかって？

霊たちに寵愛されて生まれてきた私には、わかるんだよ。お前は信頼に足る者だということが。

「……………買い被りだな。」

今朝聞いた話を思い出した悠里は、自嘲するように笑って見せた。知り合ってわずか一日。

スキルの詳細を話し、自分の大切な者の命を預ける相手を判断するには短すぎる。隣で眠そうな顔をしている雪那を一瞥すると、悠里は授業に集中することにした。

朝、話をしていた二人が連れ立って部屋を出たのを見た同級生が、

いらない噂をたてたことは余談である。
もつとも、このうわさが彼らに仲間を増やすことになるのだが。

———???———

そこは暗い部屋。四人の男女がテーブルに座り向き合っていた。

「目覚めたか。」

「そうだな。」

「無限にして夢幻。無にして有。全てを司り、全ての眷属……アルデリア。」

「彼女が復活したのならば、急がねばならない。」

「彼の覚醒にはもう少し時間が必要です。」

「姫君は？」

「そちらはすでに。問題ないでしょう。」

「わざわざ“E”まで使ったのだ……覚醒してもらわねば困る。」

「計画を早めますか？」

「そうだな。」

「禍神の干渉は？」

「まだ、ありません。しかし力を蓄えているようです。」

「気を付けておけ、奴は何を考えているのかわからん。」

「わかっています。」

「アルデリアが目覚めたということは……」

「あの二匹もじきに目を覚ます。平穏は終わりだ。」

「ああ、そうだな。」

彼らは信じている。自分たちの行動が人道にもとる行為だとしても、
最善の道を選んだのだと。

第五話 彼女の覚悟（後書き）

感想・アドバイス・評価などがありましたらお願いします。
感想をもらえると作者は泣いて喜びます。

まあ少し次回予告を。

「飛行型の【災禍】だと……！！　こんな量は無理だ！！」

「九州防衛ラインが突破された模様です！！」

「くそ、海からもか……仕方がない。学生も動員する！」

「まだまだ……奴を……アラバスタを倒すまでは死ねないっ！！」

「……私だって、戦える！」

次回。力の意味。

次話だけ長くなりそうです。

第六話 力の意味 (前編) (前書き)

策謀系の文章を書くのが難しい……。

次回予告とはかなり違う形になりましたごめんなさい。
今回文量多めです。

第六話 力の意味（前編）

『九州防衛ラインが突破された——』。

その知らせを悠里が聞いたのは、雪那との決闘から一週間が過ぎたあたりのこと。学園は当然、ハチの巣をつついたかのような騒ぎになった。

そもそも、九州防衛ラインとは何か。

人類が最も対処しやすい【災禍】は、陸上を行動する熊などの【災禍】である。

逆に、もっとも対処しづらいのは海に潜む、蛸や魚のような【災禍】。それは少し想像すれば簡単にわかることだ。海の生き物に対して、人間は常に不利を強いられる。

【災禍】ですら破れぬ網。それもいいだろう、だが、その網を固定できる場所はない。下手に船につければ、海底に引きずり込まれるからだ。では今まで人間は鯨など、力に劣る生き物をどうやって捕えてきたか。

銆や、銃や、大砲。だが強力無比な外殻を持つ【災禍】は、遠距離系の貫通武器の相性最悪の天敵である。

そこで日本政府がとった対策は、沿岸地域の放棄だ。

海に棲む【災禍】を陸上で迎え撃つ。

その結果生まれたのが、沿岸地域よりも後ろの陸上に張られた三つの防衛線である。

北海道防衛ライン。

本土防衛ライン。

九州防衛ライン。

九州防衛ラインが破られたというのは、一般人が住む内陸居住区域に【災禍】の侵攻を許したということである。

日本政府としては由々しき失態だが、情報が明らかにされるにつれて、日本政府の責任ではないことが判明した。

第特級【災禍】、ホーホーホー。

第二級【災禍】、オニカモメ。

海と空からの同時奇襲。さしもの日本政府も、【災禍】が軍団さながらの統率を持って襲い掛かってくるなど、想像の埒外であった。オニカモメの群れの数は百を超え、ホーホーホーにも百を超える未確認の海棲型【災禍】が付き従っているという。

この侵攻に対し日本政府は、学園で戦闘訓練中の学生も戦線に投入することを決定。

この決定に対し、異を唱える国民は少なかった。

超常の力を振るう彼らに、恐怖心や嫌悪感を覚えている人間も、決して少なくはないからである。

そして、学園の戦闘科に所属する全員が、九州へと向かうことになった。その数、二百六十三人。うち、三十八人が新入生である。

「諸君。これより、我らは走って（・・・）九州へと向かう。全員、右手を上げよ！」

軍服の男性が声を張り上げる。その声に従い、全員が右手を掲げた。

彼の名前は加藤鉄雄。世界的に有名なスキルの持ち主である。そのスキルの名前は《強行進軍》。世界でも三十数件しか確認されていない、他者へも効果を及ぼすスキルの持ち主。非常に希少なスキルである。

「軍神よ、我らに大地を駆け抜ける力を与えたまえ……………!!」

《強行進軍》が起動する。

右手を挙げた生徒たち全員に、力が漲るのが分かった。《強行進軍》という名称のスキルだが、決して移動専門のスキルなどではない。対象となる全員の体力、持久力、脚力を上昇させるスキルだ。

「これより全員、全力疾走!! 死に物狂いで戦場に向かう……………遅れるな!!」

暫定的ではあるが、彼はこの部隊の指揮官である。

全員が、体内に満ちた力の求めるままに、大声で応えた。

なぜ空路や海路、新幹線などの交通手段を使わないのか。

その理由はいたって単純、道中【災禍】に襲われると移動できなくなるからだ。

船を沈められる。飛行機を落とされる。新幹線の線路が壊れている。これらの事態が起きた瞬間、移動するための時間が大幅に上昇する。逆に、《強行進軍》を使つての移動だと、全員が固まって移動する。現れた【災禍】を数の力で圧倒しながら戦場に向かえるのだ。

「とはいえ、こいつはちょっとハードだな……………!!」

となりで上級生が呟く。だが《強行進軍》によって上昇している体力は、大剣やハンマーといった重い武器を使う人間にとって非常に都合がよかった。自分のスタミナを考えずに、常に最大の力で武器を振るうことができるからだ。

そのため、遠距離支援型である雪那と、ちまちま槍で削るという悠里の出番はほとんどなかった。

学園が存在する関東圏内から、わずか一日で、彼らは旧中国地方（【災禍】によって荒らされた領土は、すでに地方や県という区分を失っていた。）にたどり着いた。

「私の出番はここで終わりだな。では、武運を。」

言って、加藤鉄雄はその姿を消した。と言っても、自身に《強行進軍》をかけ、旧東京に戻っただけだが。

九州防衛ラインが突破されて三日。学園の生徒は、政府が管轄している船に乗って、海峡を突破する。

「いよいよ実戦だな、雪那。」

「……………今更。」

九州の大地に降り立った悠里は、どこか刺々しい緊張感に満ちた空気にその身を震わせる。対する雪那は、眠そうにその瞳を細めるだけ。

この時点で、【災禍】と人間の戦いはほぼ互角の様相を呈していた。いつあるかわからない襲撃に、人間が警戒し、【災禍】が時折思いついたかのように襲ってくる。それをかろうじて人間が押し返す。リーダーであるのであろう、第特級【災禍】ホーホーホーを倒さない限り、この戦いに終わりはないことは誰にでもわかった。

全長約二十五メートル、それが海蛇の異常進化型であるホーホーホーの大きさである。かつてイギリスでその姿が確認された時もそのぐらいであった。その体で潰されでもしたら、どうなるかはわかりきっていた。

悠里たちが戦場に着いた二時間後。

【災禍】が襲撃してきた。と言ってもこれは様子見のようなものだったらしく、小競り合いをすると海に引き上げていった。幸いだったのは、早めに空を飛ぶ【災禍】、オニカメを片付けられたことである。これは『飛燕』と呼ばれる男性が九州の防衛を担っていたからなのだが、こればかりは幸運というしかなかった。

この襲撃の時、遠くの海からフクロウが鳴くような音が聞こえてきた。第特級【災禍】、ホーホーホーがこちらの隙を窺っているのだ。

ほー…ほー…

遠くから聞こえてくる音に対して、仲間たちはおびえるどころか安心していた。ホーホーホーは遠くにいる、ここが襲われることはない…と。実際その襲撃の時、ホーホーホーの姿は遠洋に確認され、音もその方向から聞こえて来ている。

彼らは【災禍】に対する認識が甘すぎた。

【災禍】は、生き物なのだ。学習もするし、知恵も絞る。上層部はそのことを知っていたが、本質を見誤っていた。

固い甲羅を持つ、蟹の【災禍】の注意をひきつける。

「お願いします！」

「おうよ！」

目の前でめまぐるしく動く槍に気を取られた蟹は、背後からのハンマーの一撃で潰された。ハンマーを振り下ろした巨漢が、態勢を整えるまで、悠里は槍で牽制を続ける。

「私もいるぞ。」

次の瞬間、遠方より飛来した矢が、蟹の甲羅を貫いた。青白く輝くその矢は、間違いなく鳳院雪那のもの。とりあえず周囲の敵が一段落したところで悠里は周囲を見渡す。

（なんだ、何かがおかしい……）

《超感覚》を起動している悠里には、ほー…ほー…という音がしっかりと聞こえる。その音の出どころがはるかな遠洋であることもわかる。だが、悠里の勘が告げている、何かがおかしいと。

「どうした、悠里。」

「ああ、いや……………」

言葉を濁す悠里に、雪那は納得したような表情で遠くに見えるホーホーの影を見る。

「全く、あの音は落ち着かない。どうして意味が無い所で鳴いているんだろうな？ そんなのは自分の居場所を教えるだけだろうに（・・・・・）。」

「……………！！」

はじかれたように悠里が後ろを振り返った。人類が作った拠点では、意識が完全に前方に集中している。側面への対策を何も取っていないように見えた。警戒すべきホーホーホーは前方にいるし、ほかの【災禍】が側面から襲い掛かってきても、対処できるだけの戦力はあるのだろう。

ホーホーホーは音で敵を惑わす。しかし、その姿も見えている。警戒することはないのかもしれない……………。

いや、それは違う。

（派生スキル解放、《並列思考》！！）

「……………？ どうした、悠里？」

【災禍】とは遺伝子の異常進化によって生まれた生き物である。

それが繁殖しないと一体誰が決めた（・・・・・）？

その考えに至った瞬間、拠点の右脇の海から、全長四十メートル近い海蛇が勢いよく上陸してきた。

第六話 力の意味 (前編) (後書き)

ど、どうでした？

楽しんでもらえたなら良いのですが。感想や意見などがありましたらお願いします。

第六話 力の意味 (中編) (前書き)

厨・二・全・開！
痛くてもいいのさ。

第六話 力の意味（中編）

勢いをつけて上陸したのだろう、濡れているホーホーホーの体は勢いよく拠点へと滑ってゆく。一瞬悠里は、拠点がそのまま潰される光景を幻視したが、そんなことにはならなかった。スピードを落としたホーホーホーは、その身をくねらせて拠点へと接近していく。沿岸部から一キロほど離れた場所にあるとはいえ、最初の滑りで三百メートルは詰められている。陽光に照らされた深緑色の体表が怪しげに輝く。

「くそっ！」

最初に平静を取り戻したのは悠里だった。槍を抱えて拠点へと走る途中で呆然としている男や女を叱咤しながら、障害物をかわして、拠点へ向かう。

おそらく遠洋に見えるあいつは、ホーホーホーの子供か何かだ。よく考えれば気づけたはずなのだ。

イギリスで見つかったホーホーホーの大きさも、襲いかかっていた海蛇の大きさも二十五メートル。だが、生き物である以上【災禍】も成長する。そのままの大きさということはありえない。

「ギャアアアアア！！」

身の毛のよだつ断末魔が戦場に響き渡る。行く手を遮ろうとした誰かが、その超重量に押しつぶされたのだろう。拠点まであとおよそ六百メートル、速度を加味すればあと二分ほどでたどり着いてしまう。

（不意を突かれてあれに対抗できるか……………！？）

悠里は必死に拠点にいるであろう戦力を思い浮かべる。

一般の戦闘員が二十数人。だが特級【災禍】ともなれば、対抗できるのは俗にいう二つ名持ちしかないだろう。

『飛燕』。『乖者』。『天剣』。

（くそっ、『鉄壁』がいれば………！！）

いまこの戦場にいる人間では、あの海蛇の侵攻を止めることが出来ない。現に今も何人かが攻撃を仕掛けているようだが、その全てを跳ね除けて海蛇は拠点へと向かっていく。

「お………がい………」

その時、悠里の耳が誰かの声を捉えた。《超感覚》によって上昇した聴力でも聞き取れないほどかすかな声だったが、その声は続けて朗々と戦場に響き渡る。

（止められるのか……あの巨体を。）

「御身が元へと届け————」

「《並列思考》解除！！ 派生スキル解放、《鷹の目》！！」

悠里は並列思考を解除すると、超感覚で視力を上昇させて派生スキル《鷹の目》を発動する。

その目に映ったのは拠点である建物の周囲を渦巻く膨大な量の霊力。『乖者』が霊術を使おうとしているのだろう。だが話に聞く限り、彼女の霊術は支援に特化していたはず、結界霊術を使ってもあの巨大な海蛇を止められるかどうか。

「我が願いを聞き届けよ——」

渦巻く霊力が半透明の膜となって建物を覆っていく。この段階ではまだ物理的拘束力はないが、何らかの気配を感じ取ったのだろう、ホーホーホーがその速度を上げた。挽き潰された者の悲鳴が再び戦場に響き渡る。

「くそっ、あれじゃ間に合わない……」

一分でいい。

結界を完成させるための時間が必要なのだ。

「邪なるものを締め出せ——」

両目から一筋の血が流れる。派生スキル《鷹の目》による反動だ。眼窩の痛みをこらえ、限界を超えて力を引き出す。

（やるしか、ない！）

「派生スキル解放……《並列思考》！！」

再びの頭痛が悠里を襲う。派生スキルの同時解放……代償が大きい
ため、悠里が禁じ手としていた戦法だ。

目の前をのたうつ巨体に言葉を失う。だが呆然とした思考とは別な
思考が、即座に弱点を探して動き出す。
深緑色に輝く、鱗に覆われた体表。
そこに、槍を叩きつける。

ダメージが無くてもいい。こちらに気を引かせて、結界完成まで耐えられれば、後は逃げればいい。
それが悠里の勝算だった。

ギンツ！！！！

……………そんな。

渾身の力で振り下ろした槍は、鱗に阻まれ、下の筋組織にはじき返された。

悠里の視界の端に、黒色の尻尾の先端が映る。

(まづっ……………！？)

そしてのたうつ尻尾の一撃が、悠里の体を直撃した。

「おお悠里よ死んでしまうとは情けない。」
「は？」

悠里は、見覚えのある景色に首をかしげた。周囲は一面の雪景色、かつて訪れた悠里の精神世界だ。一つだけ前と違うところがある。目の前にいるのが、母の姿をしているなにかではなく、なぜかRPGに出てくるような王様なのだ。セリフも、どこかで聞いたような気がする。

「だが、特別に儂が生き返らせてやろう。」

さつきからかなり無茶苦茶なことを言っているが、どうも現実感がわかない。その理由が目の前の王様とその口調にあることは明らかだった。

「どうなってるんだ、俺は？」

「ふむ、瀕死のお前の状態を聞きたいのか？ 相当グチョグチョだぞ？」

「……………いや、やっぱいい。で、生き返らせるってどういうこと？」

「お前が死ぬ直前、派生スキルを解放しただろう？ スキル《天衣無縫》の発動条件は、同時に二つの派生スキルを解放すること……………」

「スキル《天衣無縫》……………って何？」

「『海は裂け、大地は砕け、天は震える。焦土に立つはただ一人。人に非ざる力を宿すもの』……………それがスキル《天衣無縫》だ。詳しいことは自分で掴め。ではいくぞ。」

「え、いきなり……………」

もたついている悠里に業を煮やした王様は、雪でできた右手を上げ

ると、悠里の頭に乗せた。瞬間。

「ぐっ、……あああああああああああ！？」

突如として体全体に走る激痛。

『思考力上昇中………派生スキル《並列思考》が解放されました。
思考力上昇中………上位派生スキル《分割思考》が解放されました。』

『視力上昇中………派生スキル《鷹の目》が解放されました。視力
上昇中………上位派生スキル《魔眼》が解放されました。』

『記憶力上昇中………派生スキル《瞬間記憶》が解放されました。
記憶力上昇中………上位派生スキル《蘇る閃光》が解放されました。』

『聴力上昇中………派生スキル《地獄耳》が解放されました。聴力
上昇中………上位派生スキル《聞き分ける者》が解放されました。』

うるさい。うるさい。うるさい。うるさいうるさいうるさいうるさい
うるさいうるさいうるさいうるさいウルサイウルサイウルサイウルサイウ
ルサイウルサイウルサイウルサイウルサイ………！！

「耐えろ、葛城悠里！ お前はここで死んでいいのか！？」

イタイ。イヤダ。

ハハノカタキヲトルマデハ………シネナイ。

「あああああああああああああつつつつっ！！」

悠里が雄たけびを上げる。

周囲の雪が舞い上がり、空中に無数の槍を形成していく。

『合計八つの派生スキルの解放に成功しました。真力の一つ、《天衣無縫》が発動します。』

瞬間、悠里の意識が覚醒した。

第六話 力の意味 (中編) (後書き)

お気に入り登録してくれた方に、失望されないように頑張ります。
試験前に入るため、更新が遅れます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6916y/>

白き鬼神と蒼穹の引き手(仮)

2011年12月3日20時53分発行